

比叡山延暦寺の三塔のなかでも一番北に位置し、最後に開かれた場所が横川地区。円仁（えんにん 794-864）が開き、9世紀後半の天台宗中興の祖良源（りょうげん 912-985）がさらに拡大した。蛇が池、赤池とも呼ばれることのあるこの龍が池には良源にまつわる伝説がある。この池の近くに大蛇が住み、往来の人々に害をなしていた。そのため参詣者も減ってしまった。そこで良源はこの大蛇をつかまえ、「おまえは身体の大きさを自在に変えられる力があるときいているが、見せてくれ」というと、大蛇は「おやすいごよう」と、たちまち横川中堂をぐるりと取り巻くほど大きくなった。こんどは「どれほど小さくなれるか」と訊ねると、良源の手のひらに載るほどになった。すると良源は、観音菩薩に念じて小さくなった蛇を池の水の中に封じてしまった。蛇は水にまつわる神様である弁財天の使いの龍神となり、道行く人々の旅の安全を護り、雨乞いの神様として人々の暮らしを護るようになった。

古来、日照りが続くと、近隣の村人は七日間にわたって日吉山王社に籠ったのち、大幟をたててこの池にやってきて、蛇の怒りを鎮め、雨が降ることを祈ったと言われている。